

ふじおおやましんこう さんがくしんこうとちいきしゃかい

#25 富士・大山信仰(山岳信仰と地域社会 下)

作者：西海賢二 (にしがい・けんじ 1951-)

刊行：平成20年(2008)



📖 解題

■ 内容

本書は「山岳信仰と地域社会」という全2巻の叢書の下巻である。上巻は『武州御嶽山信仰』であり、近世に組織された御嶽講についての研究成果をまとめている。下巻の本書においても、信仰を伝える御師・導者、参詣路・御師集落、奉納物、伝説といった視点から、富士講、相州大山講という信仰の実態を明らかにしている。「講」とは、数名の代表者を選び特定の神社仏閣に参詣するものである。



[K17.64/54]

「近世中期以降、關八州を中心に展開した在地の富士講を紹介しながら、併せて富士講と富士山を結ぶ沿道住民との関わりや、富士山の近世中期以降の展開で一つのセットとして信仰を拡大していった大山信仰と道了尊信仰の地域的展開も視野に置きながら、富士信仰の展開を素描してみた。」と冒頭で述べているように、富士山信仰に関する内容が半分以上を占めている。大山信仰に関する内容は、主に「相州大山講と蓑毛御師」「大山信仰の地域的展開」の項において紹介されている。

相州大山講の御師と檀家の関係についての研究では、伊勢原市大山を対象とするものが主であったが、本書では大山詣の西の入口であり、大山参詣道の終点の一つである秦野市蓑毛に焦点を当てている。

「片参り・山を割る考」では、18世紀以降富士山と大山をセット化して参詣することが多くなったことにとまなう禁忌伝承の変化について分析し

第3章 思想・宗教

ている。「片参り」とは、富士山だけに登り大山に登らないことを忌む伝承であり、「山を割る」とは、富士登山において特定のルートを忌む習俗である。富士山信仰と大山信仰を1冊にまとめて論じている意義もここにあるといえるだろう。

本書には大山御師と講中の研究史についてのレビューもあり、大山講研究の概観もできる。著者自身による調査に加え、『新編相模国風土記稿』など数々の史料を根拠とする多角的な論文集である。

■ 作者

作者は西海賢二。神奈川県小田原市生まれ。筑波大学大学院歴史・人類学研究科博士課程修了。博士（歴史学）、博士（民俗学）。主な著作に『城下町の民俗的世界 小田原の暮らしと民俗』（岩田書院 2014）、『博物館展示と地域社会 民俗文化史からのまなざし』（岩田書院 2014）、『江戸の女人講と福祉活動（臨川選書 27）』（臨川書店 2012）。共編の事典に『日本の霊山読み解き事典』（柏書房 2014）がある。

参考文献

- 「大山講と蓑毛御師」（『秦野市史 別巻 3 民俗編』秦野市 1987）
[K21. 63/4/2-3]
- 『山岳信仰と地域社会 上：武州御嶽山信仰』西海賢二著 岩田書院 2008
[K17. 98/24]
- 「大山」（『日本の霊山読み解き事典』西海賢二ほか編 柏書房 2014）
[163. 1/136]